Messe in h-moll

Helmut Winschermann

◇ ヴィンシャーマンのロ短調ミサ ◇

1998.11.20　盛岡市民文化ホール

主催者ごあいさつ

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインは、1977 年に発足して以来、今年で 21 年になります。今年１月、パリのユネスコ本部ホールにおいて行われた、盛岡国際平和コンサートのロ短調ミサ演奏会には、会員の多数も参加して大きな感動を得ることができました。その感動をぜひ地元の盛岡でもという思いが、本日のロ短調ミサ演奏会を行う大きな原動力になったことは疑う余地がありません。

ヴィンシャーマン氏およびドイツ・バッハゾリステンとは、1991 年の「教会カンタータ」、1993 年の「マタイ受難曲」で共演しましたが、今回５年ぶり３回目の共演の機会を得ることができたことを感謝しています。ロ短調ミサは、今年１月のパリでの演奏会のほかに、1988 年にも仙台宗教音楽合唱団と共に演奏しています。それらの経験も踏まえながら、より充実した合唱を目指して、佐々木先生の指導のもと日々練習に励んでまいりました。

そして本日、偉大なバッハの大曲を、皆様と共に味わうことができますことを、大変しあわせに感じております。

（盛岡バッハ・カンタータ・フェライン）

昨年組織された「盛岡国際平和コンサート実行委員会」の最初の事業として、パリのユネスコ本部ホールで「バッハのミサ曲ロ短調」の公演が決定、合唱団は公募によって盛岡市内外の合唱団員はじめ全国から盛岡に縁のある人々約 180 名が集いました。佐々木正利氏の指導による集中した練習を重ねて、１月１２日パリで演奏し、人種や国籍、宗教をも越えた平和の拠点ユネスコ本部ホールで世界各国の聴衆の満ち溢れる中、私達も一体となって平和の祈りを込めてこの大曲を歌い上げました。

合唱団はいったん帰国後解団しましたが、このたびヴィンシャーマン氏とドイツ・バッハゾリステンの来日に際し、「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に属していない人々が「盛岡コーロ・デラ・パーチェ」の名の下に再結集し、一緒に演奏させていただくことになりました。合唱音楽の最高峰といわれるこの曲をパリで、そして盛岡で演奏できることは合唱人としての幸せであり、指導者、仲間達そしてバッハに心から感謝しています。

（盛岡コーロ・デラ・パーチェ）

本日は、ヘルムート・ヴィンシャーマン指揮によるドイツ・バッハゾリステン、バッハ「ミサ曲ロ短調」演奏会にご来場たまわり厚く御礼申し上げます。

本日、演奏いたします「ミサ曲ロ短調」は、ことし１月にパリで開催された平和コンサートでヴィンシャーマン氏の指揮で演奏されました。このコンサートには盛岡バッハ・カンタータ・フェラインと盛岡コーロ・デラ・パーチェのメンバーが参加。その歌声は、世界平和への熱い祈りをささげるとともに感動的な演奏会へと導きました。このときの合唱団は解散しましたが、ミサ曲を歌い継ぎたいというメンバーが再び集い、盛岡コーロ・デラ・パーチェを結成、今回の演奏会となりました。

しかも、盛岡バッハ・カンタータ・フェラインと盛岡コーロ・デラ・パーチェは、バッハの権威ヴィンシャーマン氏のお墨付きの合唱団でもあります。「世界」に通じる合唱団が盛岡にあるということは、誇りでもあります。

遠くパリで響いた歌声は、まもなく高らかにそして荘厳に響き渡ります。大きな拍手でお迎え下さい。

（岩手日報社）

″主役はあなただ！合唱団万歳！″

合唱団指揮者：佐々木 正利

いま私の手元には"CMICP'98"があります。これはこの春解散した盛岡国際平和コンサート合唱団("The Choir'98 of the Morioka International Concert for Peace")が、通常練習時は時間に追われ連絡事項を確認するのが精一杯と、意志の疎通を図り合唱団の動きをお知らせするために発行した機関紙です。いよいよ盛岡でパリでの成果を報告できる演奏会を間近に控えたいま、5巻からなるこの合唱団便りを私は深い感慨をもって何度も読み返しているところです。その記事に目を這わせ、次から次へと走馬灯のように駆けめぐる沢山の思い出をいま一度巻戻し、再生スピードをスローダウンして心に焼き付けなおしているのです。なぜならば、期待と不安を胸に昨年6月スタートをきった綯い交ぜの二百余名の合唱団が、多くの紆余曲折と切瑳琢磨を経て、パリの空のもとに高らかに平和を祈り上げられたことが、私にとっては人間の未知の底力を信ずるにとても価値のあることと思ったからです。

それにしても、古今東西の合唱作品のなかで、芸術的にも、技術的にも、そして声楽体力的にも、一番崇高で難曲と目されるこのロ短調ミサ曲を、たった半年の練習でよくぞ仕上げたものだと、いまさらながら人事のように感心してしまいます。このイベントを企画立案し、計画段階からその仕事に携わったのは、光井安子岩手大学前教授、ユネスコのシュシュリック文化担当官、そして私ですが、当初はモーツァルトやフォーレのレクイエム、モーツァルトの大ミサ曲ハ短調やベートーヴェンの荘厳ミサ、はてさてハイドンの四季や天地創造といったオラトリオまで候補曲として検討したものでした。しかし、難民救済のための慈善コンサートでレクイエムとはどうしたものか、またチャリティーとしてあまり予算をかけたくない思惑から、大規模楽曲は好ましくないという考えも出てくるなど、選曲は本当に難航したものでした。結局、佐々木が取り仕切るのであるから、そのおはこであるバッハがよいのではないかとなったのですが、カンタータ等はいま一つフランス人に馴染まず集客に難があるというので、パリでもほとんど聴くチャンスがないロ短調ミサ曲に白羽の矢が立ったのです。もちろん私は「短期間でできるはずのない至高の作品」と自信のなさを吐露したものですが、決定に費やす時間的余裕があまりなく、後にも先にも他の選択肢はもう閉ざされているという状況から「清水の舞台から飛び降りる」覚悟で承諾に踏み切ったのでした。そうです。この決断は賭けだったのです。しかも勝てる見込みのほとんどない賭けでした。ただ、指揮者としてヴィンシャーマン先生を獲得できることになり、いくらか希望の光が見え始めたことも事実でしたが。

ユネスコの舞台は世界の芸術家のあこがれの世界。したがってその審査も厳しく、物見遊山的な気分での参加はそれこそ御法度。それどころか真剣に一生懸命努力したということだけを売り物にすることは到底適わず、必ず世界水準の演奏を成し遂げなければならないというプレッシャーが常にあったものでした。このことは、何も今回だけが特別というのではなく、日頃の活動時から、音楽の真の楽しみ方というのは、苦労してその音楽のもつ真の姿に触れ得た喜びを味わうこと、と意義付けしていますので、ことさらフェライン（盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの略称）のメンバーは、佐々木の厳しい指導も当たり前のこととして平然と受け止めていたように思います。ただ、私の音楽に対峙する姿勢を知らない人や、また聞いてはいたが経験するのは初めてという人にとっては、なぜこれほどに厳しくされなければいけないのか、憤りすら感じられた方も少なからずおられたようです。そうした方は拷問に近いような息苦しさを味わわれたようで、帰国後の記念文集のなかにも、公募の市民合唱団だと思って入ったならまるでフェラインに加えていただいているような雰囲気で、練習の仕方が不満だった、というのがありました。しかし、フェラインの会員もみな公募によって別々に参集したわけですから、全体の練習もフェラインペースと

いうのではなくて佐々木ペースということ。つまり、私に言わせると「それではいったいどうした練習の仕方なら不満ではないのか」ということになり、結局、この不満は佐々木に対して向けられたもの（当然いつの世にもあって然るべきこと）ですから、いっそのこと私を馘にすればよかった、ということになります。まあ何はともあれ、普段の苦労も素晴らしい本番を経験することによっていっぺんに報われるというのが持論ですから、今後もこの信念を信じて音楽作りに邁進したいと考えています。

今回の合唱は寄せ集めの市民合唱団とは到底思えぬほどのでき映えをみせました。そこには、お一人おひとりの希望を失わぬ根気づよい修練とパートリーダーたちの献身的な働きがあったと思います。そして私たちを一心にまとめ上げた団長団の導き。成功するにはこれしかないと言い切れる素敵なチームワークが存在していました。たとえ演奏に優劣があったとしても、パリのステージ上でもこの私たちのチームワークはひたすら輝きを放っていたように思います。事実、共演したすべてのソリストやオーケストラも、そして彼らはみなプロなのですが、挙って私たちのコーラスを賛辞され、コーラスによって音楽性が高められたことを潔く口に出して語られました。オーケストラのコンサートマスターは、この合唱団をハンガリーに招き、当地からルーマニアにかけて演奏旅行をしたいと申し出られましたし、ソリストは次なる演奏会でも是非共演の機会を与えてほしいと懇願なされるほどでした。このような信じ難いお言葉を頂戴できるなんて、本当に私たちは幸せ者です。そして、このことはそうした評価をいただくためにとか、何等賞とかという成果を挙げるためにとか、そういった動機付けで音楽をしてきたのではないということに、深い意義があるのです。

私が市民の合唱団のみなさんに是非知っていただきたいと思ったこと。それは世界超一流の音楽家と一緒に音楽をすることの喜びでした。特に今回、私が音楽家としては無論のこと、人間的にも心から尊敬しているヴィンシャーマン先生のタクトで音楽を体験していただけたことは無類の喜びとなりました。今年７８歳になられる先生のあの大きな手から引き出される、温かくも実に生き生きと勇躍する音楽の脈動。先生が振り降ろされる拍の数だけ、私たちに音楽が芽生えるのです。その先生のタクトで本日再びロ短調ミサを演奏できることは、私たちだけではなくてパリへの労苦を共にした盛岡市にとっても大いなる喜びです。なぜなら先生の心に確実に盛岡の印象が刻まれているからです。しかも世界のドイツ・バッハゾリステンが一緒にです。

本日の合唱は、盛岡バッハ・カンタータ・フェラインと盛岡コーロ・デラ・パーチェが担当します。パリでの合唱団は事情があって一旦解散しましたが、私たちには知事や市長が望まれたように、パリでの成果を報告・披露する義務があります。こんな義務なら喜んで果たしたいと心から願っているメンバーが、去る者は追わず、来る者は拒まずの精神で自然発生的に結成した合唱団として、新たな同胞を組織しました。したがって、パリでの輪とはまた違った構成で本日のステージを作ります。この数ヶ月、慢心や油断をすることなく一つずつ練習を積み重ね、課題をクリヤーしてきたつもりです。世界のヴィンシャーマン先生とドイツ・バッハゾリステン。彼らに迷惑をかけることなく対等に音楽に参加することができたなら、本当にこれに優る喜びはない。そうした気持ちで、自信をもって生き生きとステージに上がります。

『素人の合唱団だが、内容は玄人でありたい』（合唱団に父、母、娘と親子で参加している小川さん談。1997 年 12 月 30 日付岩手日報朝刊）。この心意気でフェラインはやっています。来年はついにドイツ・バッハゾリステンの欧州演奏旅行に共演合唱団としてフェラインが招聘されました。いまのところ、ボン・ベルリンやデュッセルドルフなどでヘンデル作曲「デッティンゲン・テ・デウム」他を演奏する予定です。歌える人間だけを集めた合唱団ではなく、合唱団の個々のメンバーがより良い音楽を具現するために精進しレッスンを積み重ねてきたフェライン。いまその真理を共有したコーロ・デラ・パーチェのみなさんと盛岡の新しい文化を作る時が来たのです。打ち上げ花火的イベントに終わらずに、平和と芸術を愛する街≪盛岡≫を世界にアピールし続けるために。

J. S. バッハ：ミサ曲 ロ短調 BWV232

Missa

Kyrie

Gloria

－ 休　憩 －

Symbolum Nicenum

Sanctus

Osanna, Benedictus, Agnus Dei et Dona nobis pacem

バーバラ・シュリック（ソプラノ）
ベルンハルト・ランダワー（カウンターテナー）
佐々木 正利（テノール）
河野 克典（バリトン）

ヘルムート・ヴィンシャーマン指揮

ドイツ・バッハゾリステン

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
盛岡コーロ・デラ・パーチェ
（合唱指揮 ： 佐々木 正利）

1998.11.20 盛岡市民文化ホール
～ 盛岡市民文化ホール開館記念 ～

主　催：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
盛岡コーロ・デラ・パーチェ
岩手日報社
共　催：盛岡市　盛岡市教育委員会　（財）盛岡市文化振興事業団
岩手県　岩手県教育委員会

指揮者・オーケストラ・プロフィール

ヘルムート・ヴィンシャーマン
Helmut Winschermann

ルール地方ミュールハイムに生まれ、エッセンとパリで学び、ヘッセン（フランクフルト）放送交響楽団、コンセルトヘボウ（アムステルダム）などのソロ・オーボエ奏者を務めた。その他、数々の室内楽団のリーダーを経て、1960年フランクフルトにおいてドイツ・バッハゾリステンを創立。以来、芸術監督として、今日まで30余年全責任を持ち、この室内楽オーケストラを独特のスタイルを持つアンサンブルに育て、特にバッハ演奏において世界的に権威ある演奏団体にした。ヴィンシャーマンは、オーボエを手にしても、指揮棒を握っても、ステージに立つときは、常に「明晰に、生き生きと、喜ばしく」という彼のモットーを貫いてきた。

ドイツ・バッハゾリステンのメンバーは、初めからヴィンシャーマンの芸術と人格を慕って集まってくる、著名なオーケストラの首席奏者や音楽大学の教授である彼の友人たち、およびその優れた弟子たちで構成されている。年配者と若い世代がバランスよく混ざり、メンバーも一定でないために、マンネリ化が避けられ、常にフレッシュな空気がアンサンブルにもたらされている。

音楽監督としては、「フランクフルト・バッハ演奏会」（20年間）、ケルン・バッハ協会の「オーケストラ演奏会」（7年間）などを手掛け、1983年からはリューデンシャイツ市で、市とドイツ政府の援助のもとに「リューデンシャイツ・バッハ週間」を主宰している。ドイツ・バッハゾリステンを率いて、あるいは客演指揮者として世界各地での演奏会のほか、地元のボンのベートーヴェンホールやケルンのブリュール城でも定期的にコンサートを開いている。

日本では、1962年以来ドイツ・バッハゾリステンとの来日以外に、客演指揮者としていくつかの日本の合唱団やオーケストラを指揮し、合唱を伴う教会音楽バッハ、『マタイ受難曲』『ヨハネ受難曲』『カンタータ』『クリスマス・オラトリオ』、ヘンデル『メサイヤ』などでも、友人のクルト・トーマスに学んだ指揮法を駆使して特筆すべき成果を上げている。また、種々の音楽祭や講演で熱心な指導を行っており、日本の若い音楽家が彼から受けた影響は少なくない。

一世を風靡した名オーボエ奏者として知られる一方、ヴィンシャーマンは優れた教育者としても知られ、1956年デトモルト国立音楽大学の教授に就任。オーボエと室内楽のマスタークラスを受け持ち、「歌うオーボエ奏者」と称される彼のクラスには世界各地から学生が集まり、優秀な後継者が輩出した。ハンスイェルク・シェレンベルガー（ベルリン・フィル）、宮本文昭（ケルン放送響）、インゴ・ゴリツキ（シュトゥットガルト国立音楽大学）、ゲルノート・シュマールフス（デトモルト国立音楽大学）、リヴィオ・ヴァルコール（フランクフルト放送響）など、それぞれのオーケストラの首席オーボエ奏者または大学の教授として活躍している。

『ブランデンブルク協奏曲』『音楽の捧げもの』『フーガの技法』などのバッハのオーケストラ作品の大曲が近年のヴィンシャーマンのプログラムの中心を占めているが、その他に、モーツァルトのピアノ協奏曲、セレナーデ、バレエ音楽、メンデルスゾーンのバレエ音楽など、ますます意欲的にレパートリーを広げており、特にモーツァルトのレコード録音に対しては、最上の評価を得ている。

また、著名な作曲家、ギゼルヘア・クレーベは、ヴィンシャーマンとドイツ・バッハゾリステンのために『ストラヴィンスキーの墓』という曲を書き、献呈している。

最近の公演評は、彼のモダン楽器によるバッハ演奏を高く評価している。日本やヨーロッパの大きなホールでは、モダン楽器を用いた方が聴衆はバッハの音楽をより理解することができるだろう。古楽器はすばらしいが、その魅力的な響きはヨーロッパの城にあるような小さなホールでこそ生かすことができる。ドイツ・バッハゾリステンのメンバーたちは古楽器の演奏にも通じている。ちょうどヴィンシャーマンが10年にわたってバロック・オーボエを演奏したように。

音楽学者でもあるヴィンシャーマンは、多くのバロック音楽の楽譜をジコルスキー社より出版、またレコードはドイツ・グラモフォン、ベーレンライター、フィリップス、ＲＣＡなどより50枚以上出している。なお、バッハゾリステン結成以前にバロック・オーボエも演奏した彼は、ドイツで最初のバロック・オーボエによるレコード録音を行っている。近

年では、ＣＤでフィリップス、カプリチオ、インターコードなどよりバッハの協奏曲、ヘルマン・プライ、エディタ・グルベローヴァとのカンタータなどがリリースされている。

ドイツ政府より最高の一等功労十字勲章、レコードに対して権威あるエディソン賞２回、グスタフ・マーラー賞、1991 年度ドイツ・ヘンデル賞など、多くを受賞している。1992 年ロンドンで王立音楽アカデミー委員会満場一致にて「名誉会員」の称号を授与された。

1991 年にバッハのカンタータ 140 番とコーヒーカンタータ、1993 年にはマタイ受難曲で、ドイツ・バッハゾリステンの演奏により盛岡バッハ・カンタータ・フェラインを指揮した。また、今年１月にはユネスコ本部からの依頼により、パリにおいて平和のためのチャリティー・コンサート『盛岡国際平和コンサート』でミサ曲ロ短調を指揮、絶賛を博した。この演奏会には、盛岡バッハ・カンタータ・フェラインと盛岡コーロ・デラ・パーチェの多くのメンバーが出演しており、今回盛岡でのロ短調ミサの演奏は、１月のパリでの演奏会の帰朝公演という意味合いもある。

ドイツ・バッハゾリステン　　DEUTSCHE　BACHSOLISTEN

1962 年に初来日した折のドイツ・ バッハゾリステンの演奏は、そのメンバーの豪華さと相まって、いまだに語り草となっている感動的なものだった。以来、翌 1963 年にはクルト・レーデル他のメンバーで来日、1965 年、1970 年、1974 年には意欲的な『フーガの技法』をプログラムに加えてその絶妙な演奏が絶賛を博した。またその間 1972 年にはエリー・アメリングとのカンタータが「管と弦、そして声までが一つの音色感にとけあい、妙なる調和の世界をつくりあげた」と評され、常に生き生きとした躍動感に富むバッハの理想像的名演を披露してきた。その後も 1976 年、1980 年、1983 年、1985 年、1988 年、1991 年、1993 年、1995 年と日本公演が続き、今回が 15 回目の来日となる。盛岡バッハ・カンタータ・フェラインとは、1991 年、1993 年に引き続き、今回の共演が３度目になる。

このドイツ・バッハゾリステンを組織したのは、オーボエの世界的名演奏家として著名なバッハ研究の権威、ヘルムート・ヴィンシャーマンである。1960 年、ドイツのウルム郊外のヴィブリンゲン修道院で定期的に開かれたフランクフルト・バッハ演奏会の芸術監督も務めていたヴィンシャーマンは、これを母体に、毎年この演奏会のためにドイツ中から集まってくる第一級の優秀なバロック音楽の演奏家たちによる文字通りの“バッハ・ゾリステン（バッハを得意とするソリストたち）”を結成した。したがって、メンバーは必ずしも一定せず、編成も弦主体だったり２管編成の木管が配されたり、12 名から 20 数名まで自由に構成されている。しかし、常に指揮者ヴィンシャーマンの深い研究に基づく正統的な解釈による格調高い演奏は、メンバーの変動にもいささかも変わらず、「バッハにもっとも忠実に、明晰に、生き生きと、喜ばしく」というヴィンシャーマンのモットーどおり、世界中の人々の心に感動をもたらし、世界のバッハ演奏の規範となっている。

今回の日本公演は、1993 年の『マタイ受難曲』、1995 年の『ヨハネ受難曲』に続き、バッハ三大宗教曲シリーズの完結となる『ミサ曲ロ短調』でその真骨頂を披露する。

ソリスト・プロフィール

バーバラ・シュリック
（ソプラノ）
Barbara Schlick

バロック期の作品の歌手として、ミシェル・コルボ、フィリップ・ヘレヴェッヘ、フランス・ブリュッヘン、ジギスヴァルト・クイケンらの指揮で国際的な活動を開始し、数年前からヘルムート・ヴィンシャーマンとも共演。最近５年間にバッハのカンタータ、マタイ受難曲、ヨハネ受難曲、クリスマス・オラトリオ、ロ短調ミサ曲など多くのレコーディングに参加。バロック作品に理想的な声の持ち主として高く評価されている。

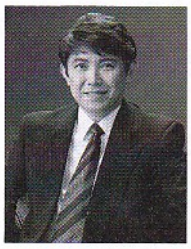
ベルンハルト・ランダワー
（カウンターテナー/アルト）
Bernhard Landauer

オーストリア出身。ウィーン音楽アカデミーでクルトエクヴィルツに師事。ルネ・ヤーコブス、キングズ・コンソート、トン・コープマン、トーマス・ヘンゲルブロック指揮フライブルク・バロック・オーケストラなどと活動。オーストリア、ドイツ、フランス、イスラエルの音楽祭をはじめ、多くのコンサートやオペラに活躍。レコーディングには、ビーバー、カヴァルリのソロ・カンタータ、J.S.バッハのミサ曲ロ短調がある。

佐々木　正利
（テノール/合唱指揮）
Masatoshi Sasaki

東京芸術大学、同大学院修士課程および博士課程修了。デトモルト音楽大学に留学。ドイツ・リート、オラトリオ、カンタータなどの宗教音楽を専門とし、特に日本を代表する「バッハ演奏家」として、1985 年のザルツブルク音楽祭をはじめ内外で福音史家、テノール・ソロを務めて絶賛されている。

合唱指揮者としても、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハカンタータ協会などで実績を上げている。二期会会員。日本声楽発声学会理事。岩手大学教育学部音楽科教授。



河野　克典
（バリトン）
Katsunori Kono

東京芸術大学、同大学院、ミュンヘン音楽大学大学院で学び、ウィーン国立歌劇場研究員として研鑽を積む。

1987 年ジュネーヴ・コンクール第２位（１位なし）、ヘルトゲンボシュ声楽コンクール歌曲部門１位、ザルツブルク市賞など受賞。ザルツブルク音楽祭、ライン音楽祭などに出演、フランスのリヨン・オペラに度々出演など、ヨーロッパで高い評価を得ている。

国内でも、小澤征爾、若杉弘、大野和士らの指揮するオペラ、定期公演や 1995 年のモーストリー・モーツァルト音楽祭に出演。ケルン在住。

ミサ曲 ロ短調 プログラム・ノート

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
サブ・コンサートマスター　佐々木 幹雄

「ミサ曲 ロ短調 BWV232」は、ミサ通常文全体を通して作曲した、バッハ唯一のミサ曲である。概観するとカトリック的なミサ曲となっているが、内容の細部を検討すると宗派を超えた視点で創られている普遍的宗教作品とみることができる。また、自筆譜には、何らかの障害による筆跡の乱れが見られ、事実上、バッハの最後の完成作となった。しかし、バッハの生前にこの「ミサ曲 ロ短調」全曲が演奏されたという記録はない。

これらのことからこの「作品」は、最晩年のバッハが自らの作曲活動の集大成として書き上げたものであろうと考えられている。

個々の楽曲には既存の曲のパロディー(編作、改作)を多用しているが、音楽的内容は元の曲以上に高まっている。それは、単に歌詞をかえただけではなく、歌詞の変更にともなって音楽の細部に至るまでバッハが手を加えた結果である。また、各曲は調の上でも編成の上でも様式の上でも、種々の音楽の響きが時間と地域を超えて多彩に結合されており、音楽史的にみても当時における古今音楽の集大成といえる。

なお、この「ミサ曲 ロ短調」という名称は後世になってつけられたもので、自筆譜は、以下に説明する４つの部分を１つに綴った形で伝えられている。

【第１部「ミサ」】

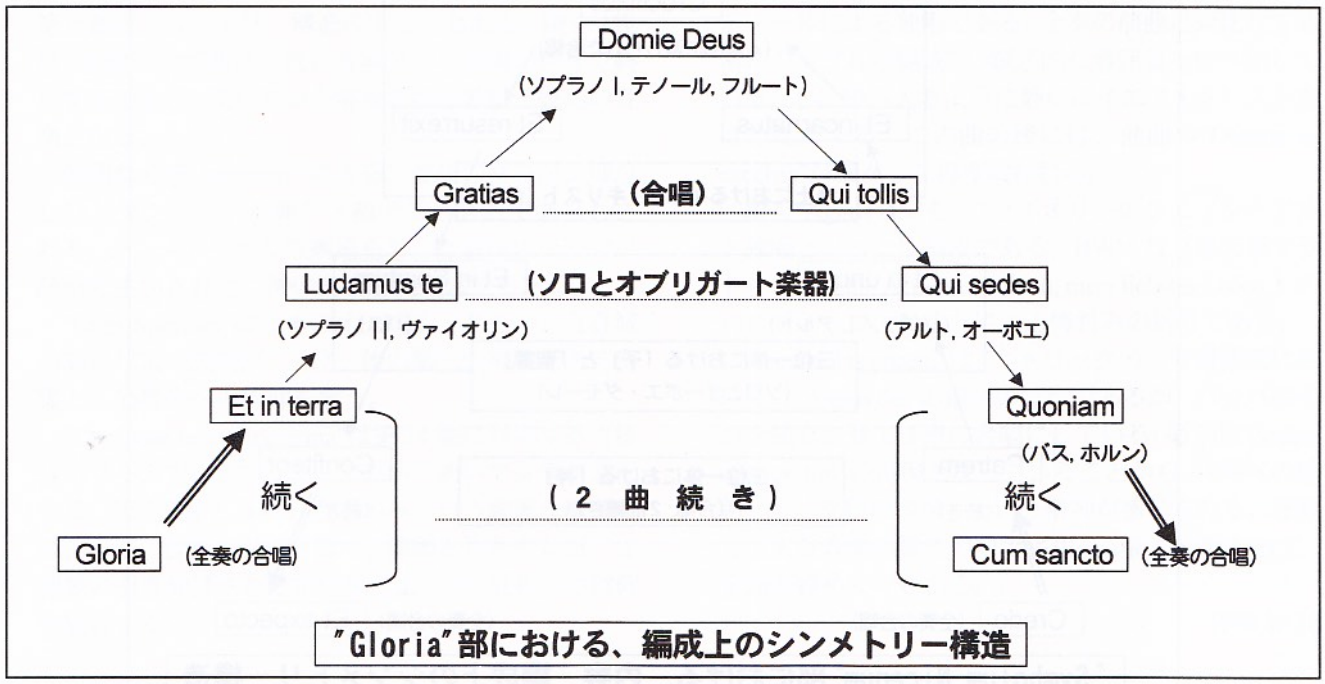
「キリエ」３曲と「グローリア」９曲から成る。成立は 1733 年。ドレースデン宮廷作曲家の称号を得るために、フリードリヒ・アウグストIIに献呈されたものである。

第１"Kyrie"の冒頭は緊張感みなぎり、かつ暖かさにあふれた４小節のトゥッティ（全奏）で始まり、続いて器楽と声楽の全体で壮大なフーガが展開される。このフーガのテーマは、しだいに上昇していきながら主にあわれみを求める敬けんな祈りであり、幾重にも重なりからみ合いながら終末をめざす。

続く"Chrisite"はカノンの技法を用いたソプラノの２重唱である。ヴァイオリンのユニゾンによるオブリガートがついた明るいニ長調で、救い主キリストに呼びかける。

第２"Kyrie"は、アラ・ブレーヴェで古様式(Stille antico)にそった作風である。フラウト・トラベルソ、オーボエ・ダモーレ、ファゴット、そして弦楽が４声の合唱に重なるコラ・ヴォーチェ(colla-voce)で演奏される。シンプルだが荘重な響きをもつ。

ここからの「グローリア」９曲は、編成の上、下図のようなシンメトリー性が考慮されている。バッハにおけるシンメトリー性は特別な意味をもつ。それは、中心におかれるものに特別な意味・価値を認めることであり、構造としては「十字架」を象徴し、主の「完全性」の理念をも表している。



"Gloria"に至って初めて３拍子、３本のトランペットが登場する。はじけながら天の高みをめざして上昇する音形をもったテーマがたたみかけるように登場し、華やかに神を賛美する。続く"Et in terra pax"では音域がぐっと低くなり、落ち着いた４拍子に変化する。地上にあって平和を希求する想いが軽やかなフーガのテーマで表現され、最後は勝利のファンファーレで締めくくられる。ちなみにこの２曲は、"Domine Deus"とともにカンタータ 191 番に転用されている。

"Laudamus te"ではソプラノ(II)とヴァイオリンが協奏しながら、主を誉め讃える。特にもヴァイオリン・ソロには、歓びで今にも踊りだしたくなるような音形が各所にちりばめられている。

"Gratias"は BWV29-2 のパロディーで、古様式のモテット風合唱曲（４声）である。神への感謝を、くり返す模倣により積み重ねていく。当然ながら歌詞をもたないトランペットで奏されるテーマにも、同じ祈りが込められている。ちなみに原曲も神への感謝を表すドイツ語の歌詞（"Wir danken dir, Gott."「神よ、我々は汝に感謝し奉る」）をもっている。

"Domine Deus"はフラウト・トラベルソのオブリガートと、ソプラノ(I)およびテノールの２重唱である。「父」と「子」の同一性を表現するかのような、カノンの技法を取り入れている。ここでバッハは、カトリックのミサ通常文にない"Altissime"「至高の」の語を、イエス・キリストに付加している。これは宗教改革者ルターの聖書ドイツ語訳に由来するものであり当時のライプツィヒにおけるプロテスタントの慣例に従ったものである。

切れ目なく続く"Qui tollis"は BWV46-1 を原曲とする４声の合唱曲。憐れみを希求する合唱とオブリガートで舞う２本のフルートが好対照をなす。

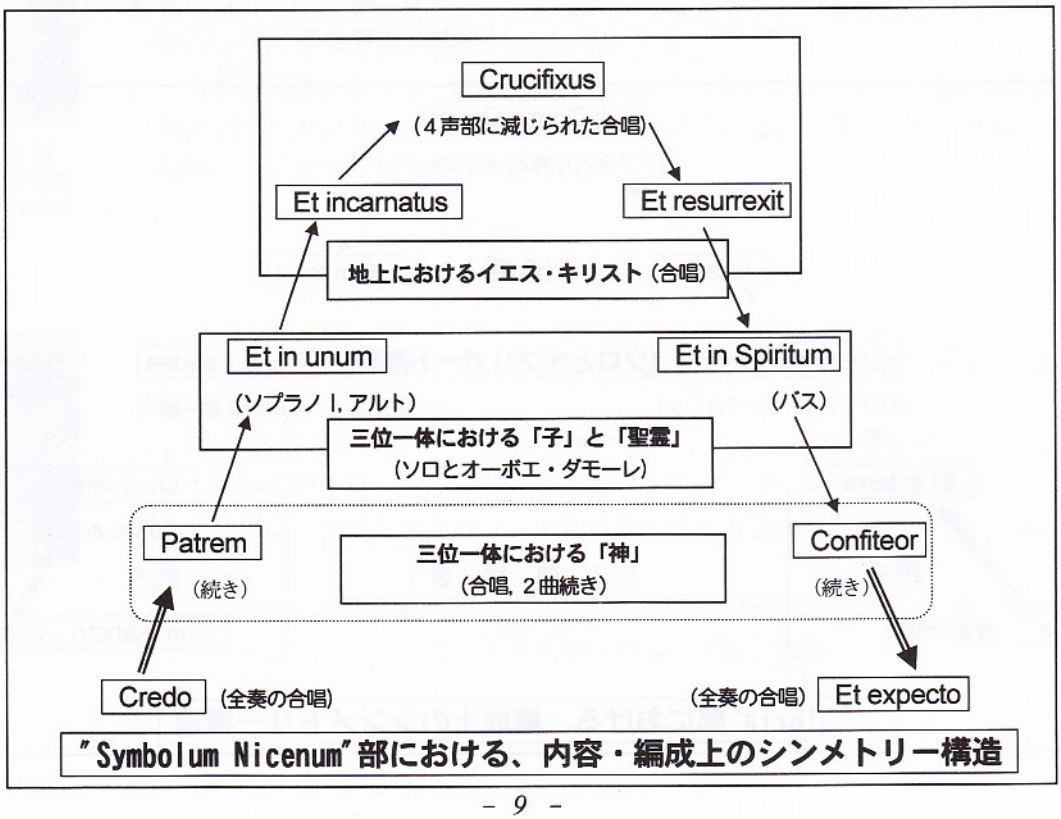
"Qui sedes"はアルトが歌う憐れみのアリアである。オーボエ・ダモーレの甘いオブリガートがよりそいながら、両者は一体化していく。

続く"Quoniam"では２本のファゴットおよびコンティヌオという低い音域の楽器が使われる。その低音の地平の上で、コルノ・ダ・カッチャと低音域のバスの堂々としたソロが唯一の神、いと高き神を確信をもって讃える。

グローリアの最後を飾る"Cum Sancto Spiritu"では、冒頭の３拍子、３本のトランペットが復活する。前曲で低音域におさえられていた響きが、一気に解放される。神の栄光とともにある聖霊を、溌剌とした音楽で歌い上げ、輝かしくグローリアを閉じる。

【第２部「ニケーア信経」】

この「ニケーア信経」の自筆総譜には何らかの障害による筆跡の乱れがあり、バッハ最晩年の作業と考えられている。また、オリジナルな（すなわちパロディではない）楽曲が比較的多く含まれている。ここでバッハは、当初第 15 曲に含まれていた"Et incarnatus est"の部分の歌詞を第 16 曲の合唱曲として独立させることによって、また第 17 曲"Crucifixus"を４声体で作曲することによって、構成の上でも（もちろん歌詞の上でも）「十字架」を中心に配置するシンメトリー構造をもたせている。



冒頭の"Credo in unum Deum"はグレゴリオ聖歌をもとにつくられたフーガである。定旋律は長い音価をもつ音符で表され、音の動きも少ない。それでいて生き生きとした「確信」が表わされるのは、力強い合唱を支える通奏低音に休みなく動く４分音符が配されているからである。確固たる信仰を宣言する。

続く"Patrem omnipotentem"は、前曲の通奏低音のリズムを生かした快活なテンポで展開する。BWV171-1からのパロディーである。テキストの上で前曲と分かちがたく結びついているこの部分を、バッハは音楽の上でもコンティヌオの音づかいなどで密接な関連をもたせている（それでも２つの曲に分割したのは、クレド全体のシンメトリー構造を作りだそうとしたからであろう）。力強いホモフォニックな信仰宣言と、ポリフォニックに展開される小気味よいテーマで、全能の父なる神を溢れ出る活気で讃える。

"Et in unum Dominum"は父なる神と遣わされた御子を象徴する、２本のオーボエ・ダモーレと弦によるオブリガートを伴ったソプラノＩとアルトの二重唱であり、三位一体の第二の神格であるイエス・キリストへの信仰を宣言する。天から遣わされる御子を象徴する下降音形や父と子の同一性を表すカノンの技法など、バッハのフィグールを用いた音象徴による作曲技法が楽しめる曲でもある。

"Et incarnatus est"は５声の合唱。ほぼ一貫して奏される、下降する「横になった十字架」の動機をもつヴァイオリンと、同じリズムで休みなく演奏される通奏低音を伴って、神秘的な響きの中に処女降誕が歌われる。

続く"Crucifixus"で合唱は４声となる。パッサカリアの主題でもあるラメント・バス（哀しみの低音）の歩みの上で、「私たちのために十字架につけられる」その痛みを、器楽・合唱それぞれのしかたで表現する。BWV12-2「泣き、嘆き、憂い、怯え」を原曲とし、第２部のシンメトリー構造の中心でもある。続く「復活」を前にして非常に低い音域でのト長調の和音で終止することで、哀しみから解放された希望と慰めの音楽となる。

隙間なく"Et resurrexit"に入る。復活の喜びが、輝かしいトランペットと弾む３拍子のリズムであらわされる。シンメトリカルな構造をもった冒頭のテーマが随所で生かされた、神の国の勝利宣言でもある。

"Et in Spiritum"は２本のオーボエ・ダモーレと音域の高いバスの独唱が、三位一体の第三の神格である聖霊と、公教会への信仰を歌う。

"Confiteor unum baptisma"は第14曲に対応する古様式のフーガで、２つのテーマのかけあいで音楽が進行する。通奏低音と５声の合唱のみという質素な編成ではあるが、合唱の内部に響く、確固としたグレゴリオ聖歌の引き伸ばされた定旋律によって、洗礼への信仰を宣言する。

"Et expecto resurrectionem mortuorum"は前曲に続けて演奏される。歌詞の前半部分には、２つの異なった音楽づけがなされており、はじめは神秘的な雰囲気の中で死者のよみがえりへの期待が示され、その後雰囲気は一変し、輝かしい溌剌とした音楽で来るべき世への期待と確信が表現される。ティンパニーが独奏的に扱われている部分もあり（一般的にはトランペットの低音として使われる）、復活の日の大地の振動の象徴となっている。

【第３部「サンクトゥス」】

全曲中最も古い1724年に成立した。６声の合唱と各３本のトランペットとオーボエという非常に大規模な編成で輝かしい響きをもつ。３連符のリズムを基本としており、湧き立つようなそして柔らかくしなやかなリズムで、万軍の主を賛美する。

"Pleni sunt coeli"では、主の栄光が天地に満ちる様が、積み重なる声部や細かいメリスマであらわされる。ここで使われている主要なテーマの音形は、そのまま次の"Osanna"に引き継がれる。

【第４部】

第４部は多くのパロディで構成されている。

"Osanna in excelsis"はBWV Anh.11をもとにした曲で、トランペット（３）、フラウト・トラベルソ（２）、オーボエ（２）、そして弦楽と二重合唱という非常に大きな編成である。８つの合唱声部で構成されるフーガをもって、「オザンナ！」の声が地上のいたるところからあげられる様子が表現される。喜びと躍動感に溢れた曲である。

"Benedictus"はフルートのオブリガートを伴った、テノールによる独唱である。全奏の前曲と対比して非常にシンプルな編成で、瞑想的な雰囲気を作り出している。心に染み入るように静かにイエス・キリストをほめたたえる。この曲の後には、前曲の"Osanna in excelsis"が華々しく再度歌われる。

続く"Agnus Dei"も、ヴァイオリンのユニゾンとアルト独唱といった小編成である。BWV 11（昇天祭オラトリオ第４曲"Ach, bleibe doch, mein liebstes Leben,）のパロディーで、アルトによる憐れみの祈りである。

"Dona nobis pacem"は、カトリックのミサ通常文においては"Agnus dei"の最後の一行であるが、バッハはそれを独立させて４声の合唱にしている。第７曲"Gratias agimus tibi"の再現となっていることから、「神への感謝」＝「平和の希求」という精神が感じられる。荘厳で広大な音楽の響きの中で平和への祈りが歌われて、全曲が締めくくられる。

1998 10.18

J.S.BACH / Messe in h-moll　BWV232

MISSA
SYMBOLUM NICENUM(CREDO)
SANCTUS
OSANNA, BENEDICTUS, AGNUS DEI ET DONA NOBIS PACEM

MISSA

Kyrie

1. Kyrie eleison（合唱）

Kyrie eleison

2. Christe eleison（二重唱：ソプラノⅠ，Ⅱ）

Christe eleison.

3. Kyrie eleison（合唱）

Kyrie eleison

Gloria

4. Gloria in excelsis（合唱）

Gloria in excelsis Deo.

5. Et in terra pax（合唱）

Et in terra pax hominibus bonae voluntatis

6. Laudamus te（独唱：ソプラノⅡ）

Laudamus te,
benedicimus te,
adoramus te,
glorificamus te.

7. Gratias agimus tibi（合唱）

Gratias agimus tibi propter magnam gloriam tuam.

8. Domine Deus（二重唱：ソプラノⅠ，テノール）

Domine Deus, Rex coelestis, Deus Pater omnipotens.
Domine Fili unigenite,.
Jesu Christe altissime.
Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris.

9. Qui tollis（合唱）

Qui tollis peccata mundi,
miserere nobis.
Qui tollis peccata mundi,
suscipe deprecationem nostram.

ミサ

キリエ（あわれみの讃歌）

1. 主よ、あわれんでください。

2. キリストよ、あわれんでください。

3. 主よ、あわれんでください。

グローリア（栄光の讃歌）

4. 最も高いところには、栄光が神にありますように。

5. 地上には平和が、善意のひとにありますように。

6. 私たちは主をほめ、
主をたたえ、
主を拝み、
主をあがめます。

7. 主の大いなる栄光のゆえに、感謝をささげます。

8. 神であられる主、天の王、全能の父なる神よ。
神がお生みになられたひとり子、
いと高き主イエス・キリストよ。
神であられる主、神の小羊、父の御子よ。

9. この世の罪を取り除いてくださる主よ、
私たちをあわれんでください。
この世の罪を取り除いてくださる主よ、
私たちの願いを聞きいれてください。

10. Qui sedes（独唱：アルト）

Qui sedes ad dextram Patris,
miserere nobis.

10. 父の右に座しておられる主よ、
私たちをあわれんでください。

11. Quoniam tu solus sanctus（独唱：バス）

Quoniam tu solus sanctus, tu solus Dominus,
tu solus altissimus Jesu Christe.

11. 主のみが聖く、主のみが王であられる
主イエス・キリストよ。

12. Cum Sancto Spiritu（合唱）

Cum Sancto Spiritu,
in gloria Dei Patris, amen.

12. 主は聖霊とともに、
父なる神の栄光のうちにおられます。アーメン

Symbolum

ニケア信経（信仰宣言）

1. Credo（合唱）

Credo in unum Deum.

1. 私は唯一の神を信じます。

2. Patrem omnipotentem（合唱）

Patrem omnipotentem, factorem coeli et terrae,
visibilium omnium et invisibilium.

2. 全能の父、天と地、
すべての見えるものと見えないものとの造り主を。

3. Et in unum（二重唱：ソプラノⅠ，アルト）

Et in unum Dominum Jesum Christum,
Filium Dei unigenitum
et ex Patre natum ante omnia secula.
Deum de Deo,
lumen de lumine, Deum verum de Deo vero,
genitum, non factum consubstantialem Patri,
per quem omnia facta sunt.
Qui propter nos homines
et propter nostram salutem
descendit de coelis.

3. 私は唯一の主、イエス・キリスト、
神の御ひとり子を信じます。
主はすべての世より先に、
父よりお生まれになりました。
神よりの神、光よりの光、
まことの神よりのまことの神、
造られることなく生まれ、父と一体であり、
すべては主によって造られました。
主は私たち人類のため、また、私たちを救うために、
天よりくだられ、

4. Et incarmatus est（合唱）

Et incarnatus est de Spiritusancto ex Maria Virgine
et homo factus est.

4. 聖霊によって、おとめマリアからお生まれになり、
人となられました。

5. Crucifixus（合唱）

Crucifixus etiam pro nobis sub Pontio Pilato,
passus et sepultus est.

5. 私たちのために、ポンシオ・ピラトの時代に、
十字架につけられ、苦しみを受け、葬られました。

6. Et resurrexit（合唱）

Et resurrexit tertia die secundum scripturas;
et ascendit in coelum, sedet ad dexteram Dei Patris
et iterum venturus est cum gloria judicare vivos et mortuos,
cujus regni non erit finis.

6. 聖書に書かれてあるとおりに三日目によみがえり、
天に昇り、父の右の座に着かれ、また栄光と共に
再びおいでになり、生きている人と死んだ人とを
お裁きになり、主の国は終わることがありません。

7. Et in Spiritum（独唱：バス）

Et in Spiritum sanctum Dominum et vivificantem,
qui ex Patre Filioque procedit;
qui cum Patre et Filio simul adoratur et conglorificatur;
qui locutus est per Prophetas.
Et unam sanctam catholicam et apostolicam ecclesiam.

7. 私は命を与える主、聖霊を信じます。
聖霊は父と子よりいで、父と子とともに
拝みあがめられ、予言者によってお語りになります。
私は使途たちから受け継がれた、
唯一の聖なる教会を信じます。

8. Confiteor（合唱）

Confiteor unum baptisma in remissionem peccatorum,

8. 罪のゆるしのための唯一の洗礼を認め、

9. Et expecto（合唱）

et expecto resurrectionem mortuorum,
et vitam venturi seculi, amen.

9. 死者のよみがえりと、
のちの世の命を待ち望みます。アーメン

Sanctus

ザンクトゥス（感謝の讃歌）

Sanctus（合唱）

Sanctus, sanctus,
sanctus Dominus Deus sabaoth.
Pleni sunt coeli et terra gloria ejus.

聖なるかな、聖なるかな、
聖なるかな、万軍の神なる主。
主の栄光は天地に満ちています。

Osanna, Benedictus, Agnus Dei, Dona nobis pacem

1. Osanna in excelsis（合唱）

Osanna in excelsis.

1. もっとも高いところにオサンナ。

2. Benedictus（独唱：テノール）

Benedictus qui venit in nomine Domini.

2. ほめたたえましょう、
主の御名によっておいでになる方を。

3. Osanna in excelsis（合唱）

Osanna in excelsis.

3. もっとも高いところにオサンナ。

4. Agnus Dei（独唱：アルト）

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,
miserere nobis.
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,
miserere nobis.
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,

4. この世の罪を取り除いてくださる神の小羊よ、
私たちをあわれんでください。
この世の罪を取り除いてくださる神の小羊よ、
私たちをあわれんでください。
この世の罪を取り除いてくださる神の小羊よ、

5. Dona nobis pacem（合唱）

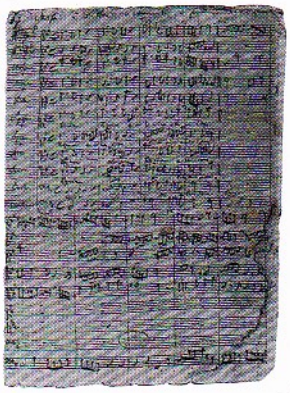
Dona nobis pacem.

5. 私たちに平和をお与えください。

（訳　斎藤　純子）

合唱団メンバー

ソプラノ I	浅沼寛子	大矢克子*	小笠原　忍	小野寺貴子	小原育世
	川村真由	菊池福子	佐々木佳子*	佐藤澄江	佐藤千砂
	澤田東子	高橋聡子	高橋菜穂子	田口れい子	竹森美映子
	田村いずみ	丹野貞子	照井和江*	野口　淑	藤沢昭子*
	松本久美子*	横内愛理			
ソプラノ II	浅沼友絵*	阿部靖子	内堀朋子*	大石敦子	大森美子*
	小野寺美起*	柿沢香織	菊池篤子	菊池節子	熊谷充代
	斉藤純子	佐藤温美	佐藤今日子*	佐藤智恵子	鹿内夏子
	清水真理子	菅村雅子	菅原由美	高橋玲子	福田温子
	藤崎美苗	細川圭子*	三原佳織	柳田松子	矢幅嘉子
	吉田澄江				
アルト I	赤坂栄里子*	赤沼周子	阿部恵理子*	伊藤由美	小川暁美
	小田島千恵	小野寺洋子	加藤緒理絵	金子千鶴	兼田紀美子
	菊地光子*	桐原絹子	今野早苗	佐々木智恵*	佐々木房子*
	佐々木文子	佐々木まり子	佐藤　恵	鈴木栄見子*	鈴木英美
	武田敏恵	田中嬉久子*	早川芙美子	福田祐子	藤沢サツ子*
	戸来正恵	松本節子*			
アルト II	伊藤てい子*	小川晄子	佐々木美智子	佐藤　公*	澤頭優子*
	志田久子*	須川加奈子	鈴木奈緒子	瀬川延子*	高橋孝子*
	武田匡子	武田真紀子	多田寿子*	立花美香子	丹野まり
	千田加代子	中野和子	原　穂波*	廣瀬利津子*	藤澤久子
	松田和子*	水野真由子*	三宅真佐子	茂木容子	吉田まき子
テノール	及川　豊	小川隆弘	小山内　薫	織田靖夫	加藤照道
	菅野松佐登	斉藤　健	佐々木和義*	佐々木幹雄	菅原伸作
	武田　宏	田代　亮	崔　日昇	寺沢敬行	徳山欣也
	中川喜之	中野寛司	三原正敏	目黒賢也	吉村　哲
バス	赤塚貴史	東　勝	阿部　学	小原一穂	小原竜太
	川村有紀	後藤田篤夫	佐々木直樹	佐々木健一	下田　潤
	杉井智一	高橋　聡	武田宏之	田沢　隆	千田敬之
	芳賀郁夫	藤澤昌裕	戸来百樹	松岡静一	水野郁夫
	横山　泉	渡辺信之			

無印：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
* 印：盛岡コーロ・デラ・パーチェ

h-moll messe